

龍源寺の歴史について(十一)

松原 泰道

明治の後半から荒れはてていた龍源寺の本堂の改築は、ついに出来ませんでした。然し昭和二年の大修理で寺としての面目を取り返すことが出来ました。それだけに当時の住職、祖来和尚と檀家総代の中沢六之助、飯田平作、梅田又八氏らの苦心が察しられます。

昭和二年十月十五日に改装のできた本堂で開山越溪大和尚二百五十年遠忌の大法要が営まれました。大導師は、松島瑞巖寺の盤龍老大師でありましたが、老師は当日の印象を謹厳な筆体(原漢文)で

南嶽祖来和尚は俗姓葛谷氏。濃州徳田郡の人。幼にして出塵の志を発して尾張の清水寺月鑑大和尚について得度、また美濃の江月要明先師について内外の聖

典を学ぶ。美濃の瑞龍滴翠老師に参すること十余年、その蘊奥を極む。たまたま東京に遊び龍源に到り、堂の荒れたるを見て大いに悲嘆し、復興の志願を發して遂いに留まる。時に食せんとするも米麦の器皿もなく、寝んとするも蒲団なし。朝暮の苦しき、言語の及ばざる所なり。ここに経営苦辛幾多年、漸く苦海をこえて本堂大修繕と書院一棟を新造して大いに旧觀を改む。また一切の什具みな完備す。実に中興というべし。開山大和尚遠忌の法式の厳正なること実に人天も感ずるところ、予、幸いに因縁あつて法席に列す。その概略を記して後鑑となす。

昭和二年十月

瑞巖百二十六世盤龍識

と書き残されました。

又、その日の老師の香語は「嶺を越え溪を渡る了祖の禪、王侯帰服し

て因縁を結ぶ、瑞雲甘露今古なし、二百有余五十年」でありました。當時、老師は八十才のご高齢でありました。が元氣に大導師をおつとめ下さいましたのはありがたいことです。

龍源寺の大修繕を果たし、住職する以前の寺の借財も滞りなく返済した祖来和尚は、昭和十一年元旦の暁に卒然として亡くなりました。六十六才の正月を迎えた直後でありましたが、生涯を「コマの舞いだおれ」路傍の石を杖ことばにして、他に共に厳しく生きた和尚でした。和尚をご記憶のお方もまだたくさんおあります。その七日に私は本山から後任住職に任命されました。

それからの後は皆さまご承知の通りです。日華事変から第二次世界大戦となり、寺は幸いに戦災を免れましたが、戦病死の檀信徒六名、寺の醇一もサイパンで、義母よねも私の出征中疎開先きで戦災死をとげました。